

東京大学漕艇部 昭和 50 年代概観

昭和 46 年度対校エイトが全日本選手権で優勝して以来、何種目かの小艇で日本一に輝いていたとはいうものの、昭和 40 年代後半の東京大学漕艇部は低落傾向を迎えつつあった。

その流れを変えるべく西浦義幸監督、須藤武幸ヘッドコーチの新体制でスタートしたのが昭和 50 年代であった。従来、ヘッドコーチを中心にコーチ陣、学生で運営されてきた部活動を、監督制度を取り入れ、OB 全体で盛り上げていこうという狙いがあった。

淡青会の支援体制が、より強化されたことは言うまでもない。学生の経済負担を軽くするための合宿費補助、また新体制の成果が現れる 50 年代中期以降、日本代表として何度も海外遠征に出かけたが、その補助など、財政的基盤も確固たるものになった。

◆ 史上初の 4 連覇達成

この新体制は 52 年度対校エイトが全日本学生選手権に優勝したのを皮切りに、確実に成果を残した。

学生スポーツは卒業により選手が交代するため、毎年、高い水準のチームを作り上げるのが難しい。とくにボートはユニフォームが要求されるから、選手の交代は致命的な問題となってくる。しかも高校からの経験者が少ない、競技するための環境が学業と両立しにくい……等々の悪条件がかさなって、全日本選手権では、過去慶大が 1 度（昭和 34 年～36 年）3 連覇したにすぎない。

東大漕艇部も 2 連覇は記録しているが、3 連覇は悲願というべきものであった。その記録を塗り替え、4 連覇を記録するという快挙を達成したのである。

その成果は、50 年代後半、須藤ヘッドコーチから酒井ヘッドコーチに受け継がれ、そのまま 60 年代以降に継承されていく。もっとも 4 連覇以後、軽量級エイトなどでタイトルは獲得したものの、現在まで全日本の優勝からは遠ざかったままだ。しかし学生の意気は衰えず、OB からの支援体制も揺るぎない。

50 年代に築き上げたものが、確実に受け継がれていることに間違いない。

東大漕艇部の活動が、学生・OB の自主的なビジョンに基づいて運営されてきたのに比較して、漕艇協会の指導性には場当たりの面が目立った。

50 年代には 2 度のオリンピックを迎え、しかもモスクワ五輪は政治的な問題もからみ、協会の判断も前例がなく難しいものであった。しかし、その点を考慮しても、選手強化の問題、大会運営の問題、海外大会への派遣の基準と選考の問題…等々学生・実業団、それぞれの選手に何らかの確固たるビジョンを示すことはなかった。

選手の強化に関しては、エイト中心の強化と小艇中心の強化の方針決定に揺れ、いたずらに指導者の不安を募ったことは疑いがない。学生選手権で種目別にポイントを与え、その得点で優勝を決める総合優勝などの制度を実施したことなどは、その問題を浮き彫りにしたものだろう。

また大学選手権を 8 月末に、全日本選手権を 11 月末に、切り離して開催した時期もあつたり、エイトと小艇を分けて全日本開催した時期もあつた。オリンピックやアジア大会など国際大会は、早くから、日程が決定しているにもかかわらず、国内の日程がシーズン・インまでに決定していないこともあつた。

さらに国際大会の派遣基準が曖昧で、しかもレースが選手権なのか選考会なのかはっきりしないことも何度かあつた。基準タイムを目指して前半から飛ばしたクルーが、後半バテて勝負に敗れ、勝負に勝

っても基準タイムに達しなかったクルーが派遣の対象になるなどというスッキリしない選考も繰り返された。

東大漕艇部は、そのたびに漕艇協会と対立（正論を述べ、自主的な意見を主張した）してきた。ボートというスポーツの本質にかかわる議論であったり、個々の議論が全て正しいかどうかは後世の判断を待つとしても、日本の漕艇界にとって必要な議論であった。

◆漕ぎ継がれるもの

東大漕艇部の運営は 50 年代に入って、ますます民主化され、漕手の自主性が重んじられるようになってきた。この漕艇部の雰囲気は、先輩から語り継がれる昔の漕艇部の話に比較しても、あるいは他大学の選手・OB の話に比較しても、おそらく最高だといってもいい。

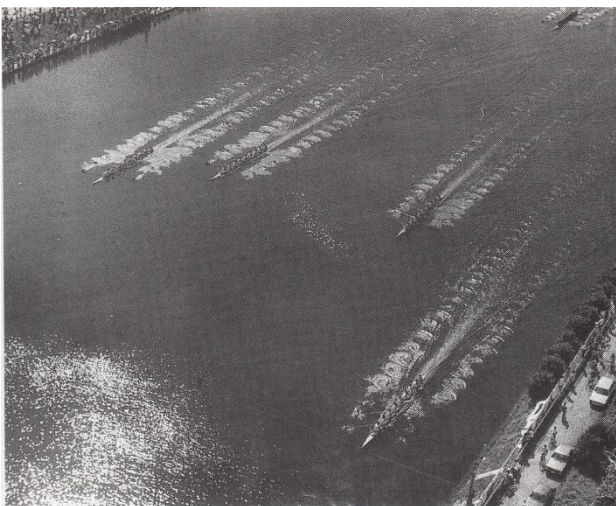
対校、ジュニア、新人が、そしてコーチ、マネージャーが、それぞれを尊重しながら自主的に運営されている。それはカネは出すが口は出さずに、学生の運営に任せてくれる OB たちの陰の支援体制があることはもちろんである。

しかし東大漕艇部が、「漕ぎたい」「勝ちたい」という基本的なところでまとまっていて、その原点以外に、他人を強制したり束縛したりするところがないという伝統が、うまく受け継がれているためだといえよう。

50 年代初期から、新人勧誘に力を入れ、対校選手も本郷・駒場に足を運ぶようになった点や、トレーニング方法や漕法などについての研究が盛んにおこなわれるようになった点など、各年度に毎年のように記録されているが、高く評価されている。

いずれにしても、50 年代を通じて、東大漕艇部に在籍したことが懐かしい思い出として書き残されている。部全体が上昇気流に乗っていった時代だったということを割り引いても、うまく運営されていたことは間違いなからう。そして、この雰囲気が伝統として受け継がれていくことを願うばかりである。

（執筆：勝尾聡 昭和 53 年文学部卒）



上：全日本選手権 4 連覇時代（ゴール付近）

右：全日本選手権 4 連覇ゴール直後

